

究極の瞬間

スポーツ写真、
その一枚に
かける思いTEXT
=中西祐介vol.
09

清水

Kazuji Shimizu



お気に入りの機材

現在はニコンD3Sを愛用している。最近D800も手に入れ、広告や商品の撮影に使用しているとのこと。「いつかD800でもスポーツが撮りたい。どん、と大きく伸ばして飾りたいね」

「障がい者スポーツは新聞だと、ニュース担当のカメラマンが撮影にくることが多い。スポーツ撮影の勝手がわからないも少しは。だからパラリンピックではいつもカメラマン同士チームを組んで撮影するんです。競技者と同じようにカメラマンも日本代表として、チームプレイですね」

DATA ニコンD2H・AiAF ニックコール28ミリF2.8D・絞りF6.3・1/250秒・ISO400・WBオート・JPEG/L/Fine・サンディスク エクストリームⅢ コンパクトフラッシュカード（2006年12月マレーシア）



1954年横浜市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、神奈川県リハビリテーションセンター写真室に勤務。障害者のスポーツと出会う。長野とシドニーのパラリンピックでは日本人唯一の国際パラリンピックメディアスタッフとして撮影した

たくさんの人に
障がい者スポーツの
魅力を届けたい

にこう付け加えた「スポーツとしてカッコいい瞬間を見せたい、そしてたくさんの人に障がい者スポーツの魅力を届けたい」。

その想いを胸に8月25日にロンドンパラリンピックの取材のために渡英する。今回は朝日新聞の契約カメラマンとして取材する予定で、撮影された写真は毎日日本に送信され紙面を飾ることになるだろう。「ロンドンでは原点に戻って気持ちのこもった作品を撮りたいと思います。」今夏はパラリンピックのメダル争いと清水氏の写真から目が離せない。



2012年8月29日、障がい者スポーツの祭典であるパラリンピックが開幕する。今月のゲストは、パラリンピックを長きに渡り追い続けている清水一二氏だ。「今大会はパラリンピックの発祥の地であるイギリスで行われるから意義深い」とインタビュの冒頭から溢れんばかりの笑顔で障がい者スポーツの魅力を語ってくれた。「選手達は自分が障がい者であることを悲観しないし、絶対に下を向かない、みんな前を見ている。彼らはトップアスリートだよ。」そう語る目からは、選手に対する愛情と誇りが感じられる。

掲載された作品は2006年にマレーシアで行われた車いすマラソンのアジア選手権で撮影された一枚。「このレースでは、道路の渋滞を避けるために、スタート時間が午前3時に設定されていた。バックのモスクを照らしているのは夕焼けではなく、朝焼けなんだ。そんな条件でも彼らは力強くレースを展開する。とてもタフだね。」極限まで鍛え上げられた肉体と、それを支える最高技術を結集して作られた車体はまさに芸術品だ。どちらかが欠けてしまっても最高のパフォーマンスを発揮することはできない。一心同体にならなければならないのだ。「選手が身につける用具は素晴らしいよ。これ一つでいろんなことが可能になる。でもそれを自分のものにしていくのは彼らの努力の賜物だね。」という清水氏はさら